

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

続・不惑のフィールド・ワーク (紀行・たより)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005851

続・不惑のフィールドワーク

久保正敏

バタフライ・ネットとモスキート・ネット
 とうとう不惑の年に入ってしまった一九
 八九年七月下旬から八月末にかけて、三回
 目のマニングリダ詣に出かける機会を得
 た。マニングリダは、図1、図2に示すよ
 うにオーストラリアの北端に位置する。今
 回は、民博オーストラリア研究グループに
 参加しておられる、小学校の美術教師、
 板良敷敏氏と一緒にある。氏は、子供の創
 造的な遊びを採集するのが目的であり、わ
 たしは、前二回の訪問で作成したソフトウ
 ェアによって蓄積されているであろうデー
 タの吸い上げ、および、新しいソフトウェ
 アの作成が主な目的であるが、マニングリ
 ダに初めて入る板良敷氏のアテンドも兼ね
 ている。

今回は、今までのようなパソコンに向か
 ってばかりの自閉的生活だけでなく、板良
 敷氏と一緒にマニングリダの小学校を覗い
 たり、アウトステーションでキャンプもし
 てみたいと考えていたので、8ミリビデオ
 カメラと捕虫網（バタフライ・ネット）を
 携えている。なぜ捕虫網かというところ、知
 る人ぞ知る昆虫学の泰斗、和田祐一先生（民
 博・言語人類学専攻）から、フィールドに
 おける蝶観察のおもしろさを常々何ううち
 に、わたしも久し振りに捕虫網を振り回し
 てみたくなったからである。

いつも通り、シンガポール経由でダーウ
 インに入り、蚊帳（モスキート・ネット）、
 寝袋といったキャンプ用品を買いに専門店
 に出かける。いくつか並べてある蚊帳のう
 ち、とりわけ大仰なテント様の蚊帳に「マ
 ニングリダ・ネット」と名札が付いてい
 る。するとマニングリダは野外キャンプ地
 の代名詞なのか、はたまた、獷猛な蚊で悪
 名高いのか、と心配になるが、値段も高い
 ことであるし、もっと簡便な蚊帳でお茶を

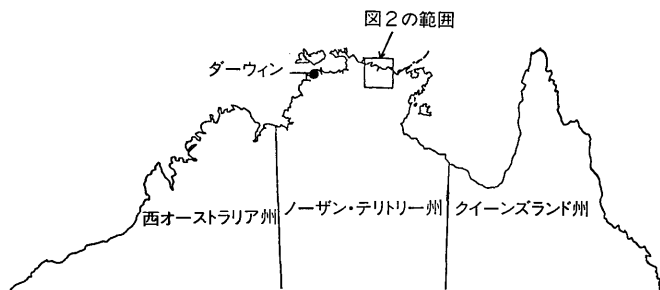
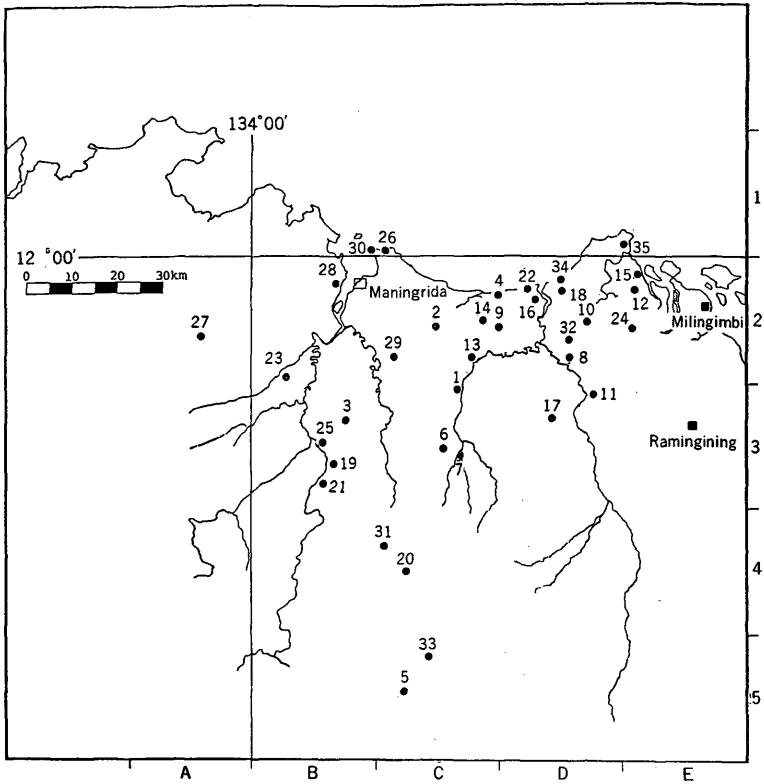


図1 オーストラリア北半



1 Angababirriyi	C3	19 Kabababuldi	B3
2 Barnamarrakkakanora	C2	20 Korlobirrahda	C4
3 Barrihdjowkeng	B3	21 Kubumi (Yikarrakal)	B3
4 Berraja	C2	22 Malamayjarra	D2
5 Birriba	C5	23 Marrkolidban	B2
6 Borlkdam	C3	24 Mewirni	E2
7 Buluhkaduru	C3	25 Mumeka	B3
8 Dam Dam	D2	26 Nadjilmuk	C1
9 Djebbenna	C2	27 Nakalaberrberr	A2
10 Djimalawa	D2	28 Nakalarraamba	B2
11 Gamardi	D3	29 Nanark	C2
12 Gamarrguyrra	E2	30 Ndjudda	B1
13 Gochan Jiny-jirra	C2	31 Ngankorlord	C4
14 Gorong Gorrong	C2	32 Wurdeje	D2
15 Gu-mugumuk	E2	33 Yayminy	C5
16 Gupanga	D2	34 Yilan	D2
17 Ji-balbal	D3	35 Yinangarduwa	E1
18 Ji-marda	D2		

図2 マニングリダ周辺

表1 オーストラリア・ダーウィン近辺の休日

	1989年	1990年	注
New Year	1月 2日 (月)	1月 1日 (月)	
Australian Day	1月26日 (木)	1月26日 (金)	(1)
Good Friday	3月24日 (金)	4月13日 (金)	(2)
Easter Monday	3月27日 (月)	4月16日 (月)	
Anzac Day	4月25日 (火)	4月25日 (水)	(3)
May Day	5月 1日 (月)	5月 7日 (月)	
Queen's Birthday	6月12日 (月)	6月11日 (月)	(4)
Show Day	7月28日 (金)	7月27日 (金)	(5)
Picnic Day	8月 7日 (月)	8月 6日 (月)	(6)
Christmas	12月25日 (月) ~26日 (火)	12月25日 (火) ~27日 (木)	

注

- (1) 1788年、最初の植民団がシドニー湾に上陸した日を記念したもの。建国記念日にあたる。
- (2) 四連休になるように設定される。
- (3) 第一次大戦時、イギリス軍に参加したオーストラリア軍とニュージーランド軍が、ヨーロッパに向かう船上で連合軍 (Australia and New Zealand Army Corps) を結成し、1915年4月25日トルコの Gallipoli 上陸作戦で勇名をはせたのを記念した、上陸記念日。この経緯を描いたテレビ劇映画『ANZACS』(オーストラリア Hal Roach Studios Inc. 1984年制作) はビデオ化され、日本でも販売されている。
- (4) 現 Elizabeth II世の実際の誕生日は4月21日であるが、公式祝日は6月上旬とするのが英連邦の慣わし。
- (5) シドニーで始まった農作物展示会「Royal Sydney Show」が全国に広まった農業祭。ダーウィンでは1953年から行なわれるようになった。都市によって、日も名称も異なる。
- (6) 日本のメーデーにあたる、労働組合の「Union Picnic Day」を起源とする。

濁すことにする。

こうしてダーウィンで数日過ごした後、軽飛行機に揺られること一時間あまり、マニングリダに着く。いろいろな調査をする意気込みで現地に入ったのだが、到着早々、町は三連休に入ってしまった、前回の訪問時に作成したソフトウェアのユーザである白人のアラン氏も不在で、その後の使用実績などを聞くこともできず、氣勢をそがれてしまった。オーストラリアは、完全週休二日制であるうえ、表1に示したように、土日とつなげて三連休、四連休になるように祝祭日が設定されている。休日の多いのは結構なことだが、限られた日数の間に仕事をしたいわたしたちにとっては、恨めしい思いだ。

しかし、いまさらあせっても始まらない。板良敷氏はカメラを片手に子供の遊んでいそうな所に出かける。わたしの方は、持参した捕虫網をさっそく役立てるべく、蝶のいそうな樹陰を求めて町をうろうろする。小学生の時から、三〇年ぶりの蝶探しである。うまく捕れるかしらん。今は乾季なのでそれほど蝶の姿は多くないが、よく

観察していると、蝶道らしきルートもわかつてきた。和田先生のように居合い抜き芸当はできないが、マンゴーの花の下で待つことしばし、現われた黄色の蝶に向かって捕虫網を一閃すると、おお、捕れたではないか。幼い日のあの懐かしい「ときめき」がよみがえる。

和田先生が言うように、これが狩猟本能のめざましいのかも知れないが（和田祐一「自然のなかのおのき」『月刊みんぱく』一九八九年八月号参照）、捕虫網を振り回しているわたしの姿は、狩猟採集の専門家であるアポリジニの人たちの目には奇異に映るらしく、「海岸べりのスワンプにたくさんいる」「ブッシュに行けばいくらでもいるよ」などと、わたしに親切に教えてくれる誰もが必ず「何のために蝶を捕るのか」と尋ねてくる。中には、「食べるのか」と、真顔で質問する人もいて、ズッコケてしまう。そのつど、蝶のコレクションが趣味であると説明するが、納得してもらえないようだ。なるほど、物に執着しないアポリジニの人たちにコレクションの意味を理解してもらおうのは難しいと、こちらが

かえって納得する。

わたしたちの宿舎の隣に住んでいる男は、コレクションの意味云々より実質本位らしく、一匹の蛾を持ってきて、その見返りにしつかりタバコ一箱を要求する。見れば、三角紙に収りそうもない大きな蛾である。わたしが集めているのは蝶であって蛾ではないのだが、これを説明するのも面倒なので交換に応ずる。もっとも、マニングリダに住みこんでアポリジニの言語を研究している白人キャロライン女史によれば、近辺で使われているどの言語でも、羽根が四枚ある生物の呼称は一つしかないそうだから、蝶と蛾の区別をしてくれぬのも無理はない。

アウトステーション行

一九七〇年頃から、アポリジニの人たちは、政府や教会が作った集住地を離れて伝統的な部族領地に戻り、二〜三家族を単位とする小さなむら（アウトステーション）を建設して伝統文化の復興を目指し始めた。アウトステーション運動と呼ばれるこの動きを支援することも、マニングリダな

ど各地にあるコミュニティの重要な機能のひとつである。

今回の訪問では、そうしたアウトステーションの生活を実見してみたい、と考えていたわたしたちは、のんびりした三連休が明けた月曜日、それが可能かどうか、B A C (Bawanga Aboriginal Corporation) のボンド氏（『民博通信』先号の拙稿ではB氏と表記していた）から紹介してもらった、アウトステーション専任の青年教師マリー先生のところへ相談に出かけた。

ここマニングリダの学校は、三、四歳の子供のためのプレ・スクール、五、一二歳児のためのプライマリ・スクール、それより年長者のためのポスト・プライマリ・スクールの三つから成り、それぞれの専任教師をあわせると、白人約一五名、アボリジニのアシスタント教師約一〇名になるが、その他にアウトステーション専任の白人教師が数人いる。ただし、現在は二六歳のマリー先生と二三歳の美人先生ザウイの二人だけで、他のアウトステーション専任教師は長期休暇で海外旅行中とのこと。これは余談であるが、オーストラリアの教師は

年間一二週の休暇が保証されているほか、数年勤めると一年の長期休暇がもらえる、育児のために数年休職しても必ず復職できるなど、非常に恵まれているらしく、日本の劣悪な条件に引き比べ、板良敷氏の羨ましがることしきりであった。

現在のところ、マニングリダが担当しているアウトステーションは、図2に示すように三五カ所にのぼり（アウトステーションの改廃はしばしば生じる）、そのうち約三分の二に学校が置かれ機能している。そうしたアウトステーションを一方所ないし二カ所訪れ、キャンプしながら、その子弟たちに読み書きそろばん（計算）を教え、週末にマニングリダに戻る、というのが専任教師の生活である。

各アウトステーションへの道は、地図にも載っていないブッシュ・ロードであるから、四輪駆動車が必須だ。マニングリダにある二台の専用車のうち、一台は政府出資金で購入したのだが、もう一台はアウトステーションの親たちがお金を出しあって買ったそうである。かように、アウトステーションのリーダーたちは、子弟の教育に

熱心である。また余談であるが、ここマニングリダで見かける四輪駆動車は例外なくトヨタ製だ。ニッサンやミツビシ製のものに比べ乗り心地は少々劣るが、抜群の耐久性を示し、ブッシュという悪条件で使用しても三年間はまったく修理不要であるそう

な。ちょうど三年目にあたっていたのかどうか、一台が修理中のため、今週はマリー先生とザウイ先生が残った一台を共用して三カ所のアウトステーションを回るが、それに便乗させてあげよう、とマリー先生がわたしたちの依頼を快諾してくれる。彼はここマニングリダに来てまだ一年半にしかならないが、それ以前はクイーンズランド州ではやはりアウトステーション専任教師をしていたベテランである。彼の弁によれば、クイーンズランド州政府は非常に保守的で、対アボリジニ政策も苛烈であり、そのためかアボリジニの人たちも荒れている。それに比べれば、ここアーネムランドのアウトステーションは自分にとってたいへん働き易い場所である、と頼もしい。彼はまことに好青年で、板良敷氏やわたしの興味に共

感を示し、いろいろ便宜をはかってあげようと言ってくれる。相談の結果、水曜日の朝出発して金曜日の午後マニングリダに戻ってくるという予定でアウトステーションに出かけることになった。

ダーウィンで買った蚊帳や寝袋、食料など、わたしたちのキャンプ用具と、マリー先生、ザウイ先生のキャンプ用具、文房具などで荷台がいっぱいになった四輪駆動車に乗りこみ、いよいよ出発である。マニングリダから南方にブッシュを切り開いた赤土の地道を時速一〇〇キロでぶっとばすこと三〇分、標識どころか目印もない所で右にターンし、小道に入っていく。これからはブッシュ・ロードである。見通しのきかない林の中、その部分だけ赤土が露出した轍がくねくねと続く。六〇キロ位のかなり高速で飛ばしているザウイ先生がスピードを突然落とすと、脇の木が地表に根を大きく張り出しているのが目に入る。それを乗り越え、しばらく飛ばしてまたスピード・ダウン、大きな岩を乗り越える。かように、どこに障害物があるかがすっかり頭に入っていないと、ブッシュを疾走する

ことはできない。

どこまで行っても似たような林の中を掃られること一時間半、ザウイ先生の目的地である Ngakarard というアウトステーションに着く。ここで彼女を下ろして小休止し、わたしたちの目的地、Kubuni に向けて再び走り出す。ところどころで、白アリにやられて倒れた木が道を塞ぎ、それを迂回する轍が新たなルートになっている。倒木を取り除けばよいものを、そのままにして迂回するものだから、そうでなくてもカーブの多い道がいっそう曲がりくねり、車のスピードはいっこうに上がらない。急にマリー先生が車を止め、指差す方を見ると、カンガルが林の奥へと跳ねて行く。突然林が開け、浅い流れがあらわれる。水しぶきを上げながら、そのまま横切っていく。今は乾季だから渡りやすいが、雨季には増水するからたいへんで、泥に車輪をとられて脱出に二時間かかったことがある、とマリー先生は事も無げに言う。

こうしてさらに一時間、目的地の Kubuni に着いたのは午後一時過ぎである。板良敷氏とわたしを車に待たせて、マ

リー先生がこのアウトステーションのリーダーに、突然の闖入者であるわたしたちの来意を説明しに行く。前日にマニングリダからマリー先生が無線ラジオで連絡を試みたのだが、電波の状態が悪く、通信できなかったのである。一〇分近くも待たされて、談判不調かと不安になった頃、ようやくマリー先生が戻ってきて、説明に手間どって待たせたがOKだと告げ、二人を住人に紹介してくれる。リーダーがたまたま不在でその長男ピリー氏にまず挨拶する。ブッシュで生活している彼はさすが狩猟の人、眼光は鋭い。彼の息子や親族など、一〇名ほどの若者たちが顔を見せるが、女性は見当らない。アポリジニ社会では女性があまり表に出てこないであろう。

あたりを見回すと、林を切り開いた直径約一〇メートルの広場に、広さ二〇畳ばかりの鉄骨組みトタン屋根だけでほとんど吹きさらしの建物がある。これが学校である。その屋根に降った雨水を貯める水タンクが脇にしつらえてある。ほかには、トタンを組み合わせた小屋が二軒、テントが一張、二本の木の間に張り渡したT字型のア

ンテナ線は地面に置かれた無線ラジオに結ばれている。その電源は横に置かれた自動車用バッテリーである。広場の隅には、コンクリートの土台の上に、直径二メートルの立派な衛星放送受信アンテナが北の空を向いているのが、周囲の物事にそぐわない。天気予報をテレビで見えるためだそう。

さっそく、昼食の準備のため、ポリタンを手に五〇〇メートルほど離れた河原まで水を汲みに行く。衛星放送受信アンテナも結構だが、発電機と給水ポンプの方が先じゃないのかと、板良敷氏と顔を見あわせる。河原には大きなテントが二つ、女性はこちらにいるらしい。こちらの人数も合わせてみると、このアウトステーションの人口は二〇〇〜三〇〇人位になるようだ。

キャンプ生活

そこいらに転がっている木切れを集め、慣れた手付でマリー先生が火を起こす。乾季で木がよく乾いているから、簡単に火がつく。木切れが燃えつくしたおきの上に、水を入れたビリー・キャンと呼ばれるキャ

ンプ用のバケツを置き、湯を沸かす。このビリー・キャンと、ケーキからシチューまで何でもこいの厚手の鉄鍋キャンプ・オーブンが、キャンプに必携である。ついでながら、これら料理用具・食器・寝具など、キャンプ用具いっさいをまとめてオーストラリア英語で *camp kit* (元来、キャンプ用寝具のみを指していた) と呼ぶ。パン、缶詰、紅茶で遅い昼食を簡単に済ませ、車で一〇分ほどの所にある河原に泳ぎに出かける。

アウトステーションの若頭ビリー氏以下若者五人、マリー先生とともに出かけた所は、川がその流れを緩め、水をたたえた美しい渓谷である。泳いだり、甲羅を干したり、のんびりした三時間を過ごす。マリー先生は、地球上で二番目に好きな場所である、と大袈裟なことを言うが、なるほど、小さな滝の水音と鳥の声以外には静寂が支配する楽園である。マニングリダの白人たちにも人気の場所だそう。

夕闇迫るころアウトステーションに戻り、夕食の準備にとりかかる。火を起こすところから始めて挽き肉入りトマト・シチ

ューができあがるのに一時間。なんだか、食事の支度ばかりしているような気がするが、まず食べることがいかに大事かを思い出させてくれるのが、キャンプ生活であるにはちがいない。

とっぷり日も暮れて、スライド上映会を催すことにする。マリー先生が持参した小型発電機にスライド・プロジェクトをつなぎ、木と木の間に渡したロープにシートを吊り下げ、これが即席スクリーンである。地面に座り込んだ子供たちを前に、板良敷氏が日本の小学校での図工授業風景を次々と映写していく。アウトステーションの人たちは、珍客であるわたしたちの故郷日本のようなすを知りたがるはずだから、この企画はきつと当たる、と言っていたマリー先生の予想通り、いつの間にか、女性も混じえアウトステーションの大人たちが大勢集まり、座り込んでスクリーンに見入っている。かくしてたつぷり一時間、日アボ交流の夕べは大成功のうちに終了した。

観客がそれぞれ散って行ったあと、寝支度にとりかかる。砂だらけのビニール・シートを広げ、マットレス、寝袋を敷いて、

ロープから蚊帳を吊り下げる。寝袋にもぐりこむと、マリー先生のマニングリダ・ネットに比べまことに頼り無げなわたしたち二人の蚊帳を透かして、満天の星に手が届きそうだ。これは感激ものである。今夜は新月だが、星明りだけでもいかに明るいかを実感できるのだから。住人が放し飼いにしている犬やブタが時々枕元を嗅ぎ回るので追い払ううち、眠りに落ちる。

鳥の声に目を覚ます。隣の二人がまだ眠っているうちにと、巻紙を手にはぶっしゅに入って行く。「雉を撃つ」のは随分久しぶりである。わたしの周囲には、高さ二メートルから五〇センチ位までの蟻塚が点在している。このあたりの蟻塚には円筒状と平板状の二つのタイプがあり、後者は不思議なことにその板面が必ず東西に平行となっているから、ぶっしゅでコンパス代わりにするそうだ。おそらく、体内に磁気センサーを持った蟻なのだろう。彼等には申し訳ないが、比較的もろいこの平板状の蟻塚を蹴り崩し、「雉撃ち」の後始末に利用させてもらおう。

アウトステーションの学校

また火を起こし、コーンフレークと紅茶の簡単な朝食を済ませる。住人の朝は早い。九時頃には子供たちが学校に集まってくる。四歳から一八歳までの男子七名、女子一〇名、そして、このアウトステーションの住人である二六歳の女性がマリー先生の助手を勤める。たいていのアウトステーション学校には、こうしたいわば現地採用の助手がいるようだが、この人たちがどのような教育を受けているのかについては、調査不足でよくわからない。

マニングリダが担当するアウトステーションの住民たちは、おおきく分けると一〇の言語グループに属する。そのうち Gwingu、Burra と二つの言語について、マニングリダの学校では、二年前から「バイリンガル・プロジェクト」が進められている。従来のように英語だけではなく、彼等自身の言語も文字化し、教育していこうというもので、英語とそれぞれ言語との対訳辞書や対訳教科書などが作られている。このアウトステーションでは、Gwingu が使われているが、熱心な

マリー先生は既にこの言語をマスターし、対訳教科書を使いながら、両方の言語の読み書きを子供たちに教えていく。年齢に市のある大勢の子供たちをまとめて教育するのであるから、たいへんである。授業の内容は、アルファベットの読み書きや、一から一〇までの数え上げなど、日本で言えば小学校一年生にあたるような初歩的なレベルである。

マリー先生は通常の授業を早目に切り上げ、アポリジニの子供たちに図工の授業を試してみたいという板良敷氏の希望を実現してくれることになった。用意してきた画用紙を使ってお面を作らせる、という試みである。板良敷氏が作ってみせた手本を参考に、ピースやシールなど氏が日本から持参した小物をあしらひながら、思い思いにお面を作る子供たち。凝り性の者もいれば、自分の適当に仕上げて仲間の邪魔をする者もいるそのような、日本となら変わらない。若頭のピリー氏も、幼児を肩車に授業を覗きにやってくる。こうして、二時間はかりの現地授業は成功に終り、板良敷氏も満足である。できあがったお面を

各自手に持ち、全員で記念撮影する頃には、板良敷氏もわたしもすっかり子供たちと打ち解けることができたのだった。

午後から別のアウトステーションを訪れる予定であったが、車の燃料が不足気味なこともあって、ここにもう一泊することに。ちょうど良い機会だということで、マリー先生は、マニリングリダから持参した鉄板にペンキを塗り、道路標識を作り始めた。アウトステーションの若頭ピリー氏によれば、このアウトステーションの正しい地名は Yikarrakal であり、流布している Kuumi というのは、昨日泳ぎに出かけた溪谷の地名なのだそうだ。この事実を周知徹底させたいピリー氏は、以前から標識を作ってくれとマリー先生に頼んでいたのである。ピリー氏以下、子供たちが見守る中で、白地に赤ペンキで矢印と地名を書き込み、標識ができあがった。この手作り標識を、アウトステーションと溪流との分岐点に取り付けに行くというので、わたしたちも同行する。

その道中、マリー先生から、アボリジニの人たちの地理観念について話を聞く。彼

等は、植生や地形の特徴、土質の特徴など、風景に対して地名を付けるので、風景がバラエティに富んだある川では、たかだか二キロメートルの流域に一〇個も地名を持っている例もあるそうだ。また、彼等の風景画を見てもわかるとおり、空中から見た地上の風景を想像することも得意とのこと。ということは、地図を読み取る能力も優れているのである。

それで思い出すのは、つい先日、マニングリダの B A C の門前で、白人のクック氏が、大きな地図を前にアボリジニの若者と老人に地名の聞き取りを行っていた光景である。クック氏が地図上の点を指しながら、このあたりは何と呼ぶか、と質問するのに対し、二人が相談したり考え込んだりしながら答え、それをクック氏がノートに記録していく。アボリジニの人たちは抽象化した地図の読み取りが不得手ではなからうか、と彼等には失礼なことを想像していたわたしには意外であったが、このマリー先生の説明で納得する。

クック氏は、この一〇数年、アボリジニの人たちのために尽力してきたポンド氏の

親友であるが、現在はダーウィンの N L C (Northern Land Council) というアボリ

ジニの人たちが設立した組織に勤めていて、アボリジニの土地権問題にかかわっている。未開発のアーネムランドは、ウラム、マンガンなどの地下資源の宝庫と言われており、各国の鉱山会社（出光など、日本の会社も多い）が熱い視線を注いでいる。N L C は、各会社から出された開発希望を受付ける窓口となり、対象地域の住民との交渉を仲介している。アーネムランドを細かく区域分けし、それぞれの地域の開発を希望する鉱山会社とその地域住民との交渉会議が、七年に一度開かれる。ある地域に関係するすべての部族が O K と言わない限り、開発やその予備調査は、次の交渉会議まで許されない。開発を受入れた場合には、地元で権利金が還元されるよう取り計らうのも、N L C の役目である。クック氏が地名の聞き取りを行っていたのは、その地域にどの部族が関係しているかを調査するためなのであった。

このように、現在はアボリジニの土地権は法律で保証されていて、開発交渉のルー

ルも確立しているのだが、ノーザン・テリトリー州政府はこれを改悪し、開発利益を自らの手に入れようと狙っている。現在はこのノーザン・テリトリーは準州であり、リベラルな連邦政府の権限の方が強いから良いものの、数年先には正式の州に昇格する動きがあり、もし実現すれば保守的な州政府の権限が強まって、アボリジニの土地権が制限されるのは必至だろうと、クック氏、ポンド氏をはじめ、心ある白人たちは心配気である。かように、土地権問題は、現在、アーネムランド・アボリジニをめぐる最もホットな問題である。

話が脱線してしまったが、ブッシュ・ロードの途中にある、溪谷との分岐点に着いて、標識を取り付けるのにどの木が良いか、ひとしきり小田原評定の結果、車のボンネットを踏台にして、マリー先生が釘で標識を打ちつける。これはミニ・ストーリーとしておもしろい、と思ったわたしは、一部始終をビデオ・カメラに収める。

いじめと体面

日も暮れかけたので、アウトステーション

ンに戻る。またまた、火を起こしての食事。その後、親しくなった子供たちと板良敷氏との間で、ゲームが始まった。子供たちがしゃべる現地語を板良敷氏が日本の文字、すなわち、カタカナで書いてみせるといふものである。ここで使われる *Crabapple* に限らず、アボリジニ言語は発音がたいへん難しい。ng音で始まる単語、rr音、ny音など、ある程度言語学の養がないと、日本人にはちょっと真似ができない。板良敷氏は二度、三度と聞きなおしては発音してみるが、なかなかうまく真似られない。そのたびに子供たちは大笑いし、より発音の難しい単語を言ってみると氏に要求する。まるで人の失敗を笑う種にしているようにも見える。マリー先生に言わせると、これは、アボリジニの人たちに一般的な一種の冗談関係、あるいは親しさを表現するためのいじめであって、決して悪意ではないようだ。

しかし、一方では、アボリジニの人たちは非常に体面を重んじ、失敗して笑われることを極度に恐れ、その結果、失敗してもその責任を自ら認めたがらず、他の事物や

人に転嫁しがちだという話も聞く。

マニングリダのBACのすぐわきにフットボール・グラウンドがあつて(図3参照)、土曜日の午後など、四チームぐらいが集まって試合をする。オーストラリアには、オージー・ルール、ラグビー・ユニオン、ラグビー・リーグ、サッカーと四種類のフットボールがあるが、マニングリダのそれは、オージー・ルールである。わたしも何度か観戦したが、スクラムもラインアウトもない、ひたすら走っては蹴る、という、素朴な、悪く言えば技巧よりも力とスピードのみのゲームである。

ポンド氏の話によると、試合が終わっても、もう一波乱なしには終わらないのが、アボリジニ流。負けたチームは、自分たちの力量不足を決して認めず、やれ相手チームがズルをしたとか、審判が悪いだのと、難くせをつけ、時には相手チームと殴り合いを演ずるそう。いい年をして大人げない、というのはわたし日本人の考え方。彼等にすれば、面目を失うのはたいへんなことらしく、生活のいろいろな場面でも同じような行動パターンを示し、しばし

は白人を悪者にして、失敗の原因を押しつけるそうだ。アポリジニ社会の外部に責任を追いやって、彼等の社会的紐帯が崩れるのを防ぐのであろうが、自分など知らないうちに何度悪者にされたことか、とボンド氏は笑っていた。

子供たちについても同じような話がある。この六月、マニングリダに各コミュニティから小学生が五〇〇名も集まって、コミュニティ対抗運動会が開かれた。その模様はダーウインのローカル・テレビで週に一度放送される『マニングリダ・ニュース』の時間に紹介され、わたしも見る事ができた。

マニングリダには、この『マニングリダ・ニュース』を制作するためのミニ・テレビ局があって、三名のスタッフ（と言ってほとんど素人同然）がビデオ・カメラを持って取材に出たり、スタジオでインタビュしたり、事あれかしと走りまわっている。一年前の訪問時、「日本から来たコンピュータ・マン」ということで、わたしもあやうく出演させられそうになった。

話を運動会に戻すと、徒競走にせよ、団

体競技にせよ、優劣の結果がはっきり出るわけだから、負けた側、特に、徒競走でビリになった子などは、恥かしさのあまりすっかりしよげ返り、ゴールまで完走せず観衆の中に逃げ込んでしまったりして、痛々しいかぎりであるという。これも、面目を重んじるアポリジニ社会の重圧ゆえであろう。その救済策として、白人教師たちは、競争に与える賞以外にも、「お料理賞」とか、「お掃除賞」とか、すべての子供に少なくとも一つは賞が行き渡るべく、賞を乱発するそうである。最初から競争なんかさせなければよいものを、とにかく優劣をはっきりさせたがる白人文化とアポリジニ文化との相克の一例、といえば大袈裟に過ぎようか。

こうして、板良敷氏と子供たちの交流が続いた翌朝、マリー先生は、次回に訪れるまでの宿題として、ワークブックを子供たちに手渡し、ビリー氏に頼まれたもうひとつの仕事に取りかかる。広場の中央にある十字架のペンキを塗るのである。この十字架が、このアウトステーションでの教会がわりだとのこと。わたしたちも、刷

毛を持ってペンキ塗りを手伝う。

彼等の文化にキリスト教がどのように浸透しているのかについて、何ら調査していないわたしには語る事ができないが、アポリジニ流に変容したものであるらしく思う。というのは、わたしたちが訪れるつい二週間前、マニングリダの教会で聖職位授与式が行なわれたのだが、『マニングリダ・ニュース』で放送されたその模様を見ると、式の後のセレモニーは、まったくアポリジニ流の儀礼に他ならず、十字架さえも、BAC内にある美術工芸センターの芸術作品展示即売コーナーに並んでもおかしくない彩色が施されてあったからである。

そうこうするうち、このアウトステーションを離れる時がきた。短い触れあいだったが、子供たちやビリー氏と別れの挨拶をかわし、ザウイ先生の待つ *Ngankaland* へと車を走らせる。正午頃に到着してから、そのアウトステーションでも、板良敷氏が図工の授業をしてみたらどうか、と二人の先生が提案してくれる。円形に切った画用紙に、空を見上げたようす、あるいは、空中から地上を見下ろしたようす、ど

ちらかを描く、という、板良敷氏たちが日本であみだした課題を与える。昼食時にもかかわらず、九名の子供たちがつきあってくる。板良敷氏が持参した、金色や銀色の星型シールを使いたいのがためか、全員空を見上げた絵を描く。日本の子供たちには、こうしたシールの貼り方に三つのタイプが見られるそうだが、ここでも同じ傾向が出ている、と板良敷氏は喜ぶ。できあがった作品を手に全員が記念撮影したのは、午後二時をまわるころである。

空きっ腹を抱えて、一路マニングリダへと車を走らせる。一時間の後、わたしたちの宿舎に到着して、後ろの荷台から転がり降りてきた板良敷氏は体中砂だらけである。髪を掻き回すと砂埃が舞い上がる。地道を時速一〇〇キロの猛スピードで突っ走って来たから無理もない。シャワーを浴びてようやく人心地がつく。キャンプ生活も二泊三日くらいなら楽しいものだが、風呂にも入れない生活をそれ以上続けるのは我慢できない、民博の小山修三氏、松山利夫氏のように何カ月も生活するには相当の覚悟が必要だろう、というのが、アウトステ

ーション生活を垣間見たわたしたち二人の正直な感想である。こちらに帰ってみると、鉄筋の学校、マーケット、診療所、電気、水道、なんでも揃っているマニングリダが、ニューヨーク並の大都会に思えてくるから不思議である、と板良敷氏と語りあったことであつた。

ソフトウェアの思わぬ盲点

マニングリダに帰り着いたのは金曜日の午後であるが、次の月曜日がまたまた休日で、三連休になることを、初めて知る。ピクニック・デーと言うそう。ピクニックでもハイキングでも、勝手にしてんかと、あきれたわたしは、またもや蝶探し三昧の三日間を過ごす。

明けて八月八日火曜日、自動車修理業務支援ソフトウェアのユーザであるアラン氏とようやく会うことができた。コンピュータの動きがおかしい、と彼が言うので調べてみると、電源投入後の日付入力がうまくゆかぬ。「月―日―年」という順序で表記するアメリカ流とは違って、ここオーストラリアでは、「日―月―年」のイギリス流

が一般である。日付入力の受け付けは、MS-DOSのシステム・プログラムが担当するのだが、わたしがイギリス流儀で入力できるようにセットしておいたはずなのに、アメリカ流の入力しか受け付けなくなっている。

日付が狂うと、自動車修理業務に関するデータベースの内容に影響があるのはもちろんのこと、顧客への課金・集金の計算にも狂いが生じるから、わたしは青ざめる。どうやら、MS-DOSのシステム・プログラムが、古いバージョンのものに置き換わっているらしい。さてはアラン氏が何か変なことをしたな。

詰問調にならないように気をつけながら、彼を問いただしてみる。彼はダーウィンの「Telogon」（オーストラリアの電電公社）に勤める友人から、いろいろなパソコン用ソフトをもらっては、BACのパソコンにコピーしていたのである。パソコンを自らさわってみようという、その意気や良しなのだが、生半かな知識でハードディスクにディスクの中身を全部コピーしたものだから、肝腎のシステム・プログラム

まで古いパソコンに置き換えてしまったのである。これが五月のことらしい。

これはわたしにとって思わぬ盲点であった。汎用のパソコンであるかぎり、いずれ所期の目的以外に使われだすのは、当然であった。このことをまったく予想していなかったわたしは甘い、と言われればそのとおりだから、誰を恨むでもなく、恐縮しているアラン氏に正しいコピーの方法を教え（著作権法上は正しくないが）、蓄積されたデータを五月に遡って修正する作業に四日間を費やしたのである。

マニングリダの授業参観

この間、毎日午前中は板良敷氏につきあって、二クラスあるプレ・スクールのうち、二九歳美人先生ヘレンのクラスをのぞかせてもらう。白人の子供が三名、アポリジニの子供が一〇名位である。建前では四歳児のためのクラスだが、中には七歳のアポリジニの子もいて、適当にプライマリ・スクールと振り分けているようだ。ヘレンは、八年前に交換留学生として日本を訪れた経験があり、その時のアルバムを子供た

ちに見せながらわたしたちと日本の紹介をしてくれる。彼女もたいへん親切な人だ。

授業の内容は、お遊戯やお絵描きなど、日本の幼稚園と変わらない。ここでも板良敷氏が図工の授業を行なうことになる。その準備のために、学校に備えてある画用紙をいろいろ調べさせてもらうが、適当な厚さのものが見当らず、板良敷氏も苦労する。氏の観察によれば、ダーウィンの文具店でも品揃えは充分ではなかった。画用紙に限らず、あらゆる商品について、日本の文具メーカーの消費者対応がきわめてきめ細かいことを改めて見なおす。

こうして、午前中はプレ・スクールにゆき、午後はデータベースの復旧と、アラン氏から要請のあったソフトウェアの改良作業を進める毎日が週末まで続く。新しく開発する予定の、社会保障費給付業務支援のためのソフトウェアについて、ポンド氏と打合せをしたいのだが、彼をなかなかつかまえることができない。乾季はアウトステーションの活動が活発であり、いきおいBACに要請される仕事も多くなって、ポンド氏もあちこちに泊り掛けで出かけ、不

在がちなためである。ようやく土曜日の夕方、アウトステーションから戻って来た彼と予備的な打合せをすることができた。

明けて次の週に入り、板良敷氏とともに、今度はプライマリ・スクールの授業を参観させてもらうことになった。六クラスあるうち、白人青年デレク先生のクラスを校長から紹介してもらう。白人の六歳児が四名、五〜一〇歳のアポリジニの子供が一〇名、八歳のフィリピンの子が一人居るクラスである。アポリジニの子供たちは、全員 *Burara* 語族である。同じ語族の子供を集めて白人の子供と一緒にクラスに編成するので、年齢にばらつきが生じるのだから。

同じ語族の子供を集めてあるのは、英語教育と *Burara* 語教育との二部制に分けて授業を行なうためである。このクラスには、アシスタント教師として、*Burara* 語族のジミー先生がいて、デレク先生とペアを組み、授業を受け持っている。算数や英語の読み書きなどは共通の授業を行なうが、必要に応じて子供たちを二つのグループに分け、二部授業を行なう。グループア

分け方は、家で英語を話すか Burarra 語を話すか、によって子供たち自身に選ばせるという、しゃれたものである。

Burarra 語族のカリキュラムは予定表で決められており、ジミー先生が、バイリンガル・プロジェクトの一環として作られた対訳教科書や絵本を使って、Burarra 語の読み書きを教える。このクラスを參觀し始めて二日目のこと、これから近くの海岸で動物の足跡を学習する授業を行なう、というので、それはおもしろいとわたしもついてゆく。学校から五分も歩けば、砂浜に出る。子供たちを前に、ジミー先生は砂の上に、手の平、指、腕を押しつけ、これが海亀、これがなんとか言う鳥、これがなんとか蛇、と足跡を描いて見せる。実に器用なものだ。先生は、その特徴を解説したあと、真似てごらんと子供たちを促す。遊び半分ながらも、彼等も見よう見真似で足跡のスタンプを砂浜に描いていく。将来、子供たちがブッシュで狩猟生活を行なううえで必須の訓練なのである。これはまさにアボリジニの伝統的教育だ、とわたしは喜んでビデオ・カメラを回す。

その帰り道、ジミー先生にアボリジニ教育の特徴について話を聞く。白人教育のような押しつけを決してしないのが、アボリジニ教育であると、彼は盛んに強調する。例えば、これから教室に帰って海岸で見たものを絵に描かせる予定だが、白人教師のように舟を描け、島を描けと課題を指示するのではなく、自由に画題を選ばせるのだそうだ。確かに、白人流の美術教育はステレオタイプに過ぎ、獨創性を重んじていないようだ、と、板良敷氏もうなずく。

それでは、子供たちの獨創性を引き出すような授業を示してみようというわけで、次の日、板良敷氏の授業をこのクラスでも試みる。ここでも、ピースやスパンコールなど、スペース、キラキラした小物が子供たちの人気を集める。アレク先生、ジミー先生も、もの珍しげに覗きこむ。器用な子、雑な子、やさしい子、意地悪な子、生意気な子、工作に取り組む子供たちを見てみると、一人一人の個性がわたしにもわかってきておもしろい。

板良敷氏とともに学校に足繁く通ううち、子供たちですっかり顔が売れたものと

みえ、町を歩くとそこかしこからわたしの名を呼ぶ子供たちの声が聞こえてくる。わたしの名字は二音節で覚えやすいのである。無愛想な奴と悪評が立ってはいけないし、元来子供が嫌いではない方だから、わたしもできるだけ愛想をふりまく。板良敷氏も子供の遊びを追っかけるうちに彼等とすっかり仲良しになる。ある午後には、悪童どもが八人もわたしたちの宿舎に押しつけてきて、食料を食い荒らされてしまった。

ある朝、板良敷氏と子供たちの話をしていた時のこと、話題に上っている一人の子が、アボリジニだったか、白人だったか、わたしは一瞬混乱した。子供たちと仲良しになるにつれ、個性で一人一人を識別できるようにになると、彼等の皮膚の色を意識しなくなるのであろうか。これは、わたしの意識の中でアボリジニの人たちとの間の垣根が一つ取り払われた証拠かも知れぬ、と少しうれしくなる。

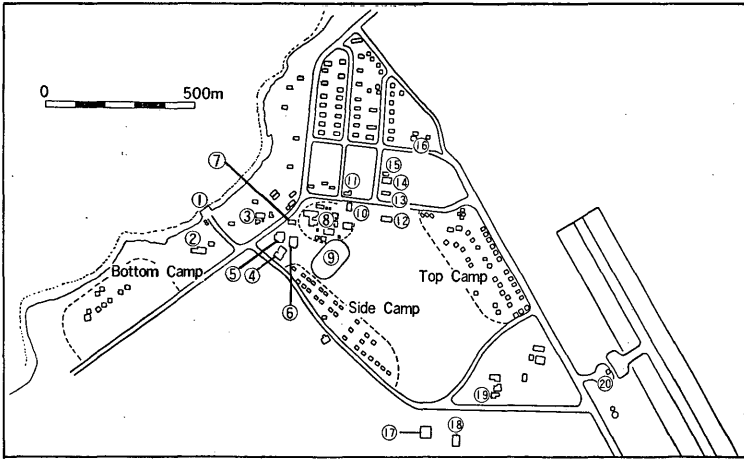
マニングリタを訪れる白人たち

板良敷氏とわたしが寝起きしているブレ

ハブ宿舎は、連邦政府雇用教育対策局の管轄下にあり、本来、学校関係者のためのゲストハウスであるが、この町には他にももう一軒しかゲストハウスがないこともあって、公的な仕事でマニングリダを訪れるさまざまな白人たちに提供される。わたしの場合は、ポンド氏のはからいで、私的な研究ではなくBACの業務支援が訪問目的である、という触れ込みになっているので、この宿舎を利用できるのである。

この宿舎には、ダイニング・キッチンに寝室が二つ、それぞれにベッドが二つ備えてあり、最大四名収容できる。エアコン、電気コンロ、電子レンジ、シャワー、トイレ、冷蔵庫、冷凍庫、洗濯機、乾燥機、何でも揃っているのがうれしいが、何と云っても、現地住人の家に居候せねばならない時のような気兼ねの必要がないのがありがたい。しかし、わたしの滞在時に、いつもこの宿舎を占有させてもらっているわけではなく、公用で数日間マニングリダに滞在する白人たちと相部屋になることもしばしばである。

これまでにわたしが相部屋になった白人



- | | |
|---|------------------------------|
| 1 Barge Landing | 8 School |
| 2 Maningrida Progress Association (MPA) Warehouse | 9 Football Oval |
| 3 Health Clinic | 10 Basketball & Tennis Court |
| 4 Maningrida Council | 11 Church |
| Administrative Office | 12 Recreation Hall |
| Council Chamber | 13 MPA Takeaway Store |
| Town Clerk | 14 MPA Store |
| Social Security Office | 15 MPA Office |
| Bank | 16 Police & Courthouse |
| Post Office | 17 Power Station |
| etc. | 18 Council Workshop |
| 5 Babbarra Women's Council | 19 MPA Workshop |
| 6 Bawinanga Aboriginal Corporation (BAC) | 20 Airport Terminal |
| 7 Museum | |

図3 マニングリダ

たちは、マニングリダの町会から依頼されて道路整備や家屋の建築にかかわる工事関係者二組計四名、BACの給与計算のために二週間毎にやってくる会計士、各アウトステーションに太陽電池電源装置を設置してまわる小さな電子機器会社のオーナー、などである。二組の工事関係者はいずれもギリシア移民であった。

ギリシア系の人たちが数多くオーストラリアに移民していることはよく知られている。一九八六年のオーストラリア国勢調査によれば、ヨーロッパからの移民一世人口の第一位はもちろんイギリス・アイルランドであるが、ギリシアは、ユーゴスラビア、イタリアに次いで第四位を占める。また、二世、三世も含めると、世界の都市のうちでギリシア人の人口が多いのは第一位アテネ、第二位がメルボルンなのである。

ストラリア英語で未開地を指す)の世界と都市文明の世界を往復し、それぞれの楽しさを交互に満喫しているように、わたしには感じられた。ただし、彼等の話す英語は、母国なまりがオーストラリア流にさらになまっただうえに、アボリジニ言語から借用した単語の混った、いわばアーネムランド方言なので、会話には苦勞する。

こうしたビジネスマンや役人など、公用でやってくる人の他に、私的な目的の白人もいる。もともと、マニングリダには許可なく入域できないから、私用で訪れる白人は、研究者や当地に住んでいる白人の親類縁者に限られる。前にも触れたが、BACには美術工芸センターが併設されていて、アボリジニの芸術作品の展示即売コーナーがある。休暇を兼ねて当地の知り合いを訪れた白人たちが、時々ここに買物にやってくる。

ある午後のこと、家族連れで美術工芸センターに買物にやって来た白人婦人が、ここで何をしているのか、とわたしに尋ねたついでに、二人の日本人芸術家がこの学校に來ているそうだが知っているか、と不

思議なことを言い出す。わたしには思い当たるふしがないので、だんだんに聞きだすと、どうやらわたしたちのことらしい。学校に出かけて授業を参観したり、時には板良敷氏が自ら図工授業を行ない、わたしにもわか美術教師となって手伝いをしたり、という姿が、わたしたちの来意がよく飲み込めていない白人たちの間で噂となり、それが変容して、いつの間にか芸術家に化けていたのである。

ここマニングリダは、けっこう人口が多い町ではあるが、住人はお互いの顔を見知っており、それでもって安定している小さな社会であるから、些細なことでも噂話の恰好のネタとなり、たちまち町中に広まる。他所者であるわたしたちの噂ならなおさらだ。わたしが初めて当地を訪れた一年前、昼前にマーケットに出かけて最初に買ったのがタバコだったことが、午後一番にはポンド氏の耳に届いていたし、今回もわたしの蝶探しとその日のうちに知られていた。

おそらく、アボリジニ、白人、それぞれの社会にいくつもの噂のネットワークが並

存しているのだろう。白人教師たちの間にもいくつかの派閥があるようだ。表面上は乙に澄ましている白人教師たちも陰ではべちゃくちゃ噂好き、その噂が派閥を越え、教師集団を越えて回り回るうち、このような芸術家という珍説に交じたものと見える。

好奇の目が常に注がれているのは煩わしいことだが、今のところ、わたしたちに關する噂話に悪意の味付けのないのが救いではある。アポリジニの人たちの噂のネットワークについても、機会があればぜひ調べてみたいものだ。おそらく、無線ラジオも噂の伝達と交容に大きな役割を演じているにちがいない。

ノミと野火

アポリジニの家族は、ほとんど例外なく犬を飼っている。と言っても、首輪や鎖を付けない、放し飼いである。肥満した犬にはお目にかからないから、アポリジニの人たちがきちんと餌を与えているのではなさそうだし、叱る時にも物を投げつけたりして、けっこう手荒く扱っているところを見

れば、主従が麗しい絆で結ばれているようにも思えない。一定の緊張を伴いながら飼主との關係を保っている犬たちであるから、人間に対する目は厳しい。他所者のわたしは必ず吠えたりされる。番犬や猟犬としては申し分ない野生味を残し、チャラチャラ腑抜けた愛玩犬にはない彼等の精悍さを好ましく感じるのではあるが、困ったことに、彼等は所かまわず糞をする。今は乾季だから、一日もたてば干からびてしまいが、足もとには常に気をつけねばならない。

さらにわたしたちを悩ませたのは、彼等に寄生する犬ノミである。いたる所の枯れた下草に、犬ノミが大挙して潜んでいる。今年は無節操にも人間と犬を区別しない。わたしたちが草むらを少し歩けば、もう数匹の犬ノミが短パンの素足に跳び付いている。現地のアポリジニや白人の人たちは、抵抗力を備えているので、文字通り痛痒を感じないらしいが、今まで実物にお目にかかったことのないわたしたち二人には、効果てきめん、咬まれるとたちまち水泡ができ

る。搔きむしると皮膚が破れ、いっそう痒みが広がる。

当地で人を咬む昆虫として、蚊やサンド・フライという小さなハエしか知識がなかったわたしたちは、最初のうち、蚊に刺すはやけに痒いじゃないかとポリポリやっていたが、ポンド氏から犬ノミと教えられ、驚いた時は既に遅し、二人とも下肢に数十カ所の咬み跡を持つ身となっていた。(年をとるにつれ傷の回復力が衰えるものとみえ、この原稿を書いている現在に至るも、醜い痕跡はいっこうに消えない。このあたりが不惑のフィールドワークのつらいところだ。)

犬ノミと知ってからは、二人とも極端に足もとに注意深くなる。宿舎に入る時は必ず殺虫剤スプレーを自らの下肢に吹き付けてノミを追い払う。それでも、いつの間にか宿舎に紛れこんだノミが、寝ているわたしたちを襲う。足もとや腹のあたりで、モゾモゾした動きがあれば、ハッと目をさまし、文字通りノミ取りまなこで敵を探す動作が身に付く。おかげで、皮膚感覚が異様に鋭敏になってしまった。指でノミを押え

ても、連中の外皮は非常に固いから、簡単には潰せない。こちらがモタモタしていると、得意の跳躍力で逃げられてしまう。帰国してから母に教えられたところでは、指にツバを付け、その粘りでもってノミを逃がさないのがコツだそう。何匹も一度に捕えるには、とりあえず次々と口にはうりこむのが、正解とのこと。げに先達はあらまほしきかな。

抜本的に犬ノミを駆除するには、連中が潜んでいる下草に軽油を撒く、塩を撒く、下草を燃やす、の三法があるとボンド氏に教えられたが、前二者はわたしたちの手に余る。最後の方法も、下手に火を放って宿舎を焦がしはせぬか不安なため、実行に踏み切れないまま二〇日はど過ぎたある午後のこと、近所でパチパチと下草の燃える音がする。アポリジニの子供たちが五、六人、ブッシュ・ファイア（野火）を始めたのである。年嵩の子は手に木の枝を持ち、意図せぬ所に燃え広がれば叩き消すべく、気を配っている。

これがあるがたい、ベテランの子供たちに任せれば安心、と考えたわたしたちは、ぜ

ひわたしたちの宿舎の回りにも放火してくれ、と子供たちに懇願する。下草の背丈は数センチだから、火は地面を這うように広がっていくが、立木に燃え移る程には大きな炎を上げない。今は乾季なので、ダーウィン近辺でも、自然発火によるブッシュ・ファイアの煙が何本も立ち昇っているのを毎日目にしたが、これらが決して大規模な山火に至らないのは、立木の密度が小さいし、その背丈が下草よりも大きいからである。危険の少ないことをよく知っているアポリジニの人たちは、実に気軽にブッシュに火を放つ。特に子供たちは放火が大好きである。

アポリジニの人たちが好んで火を放つのは、ブッシュをクリーンにするためだそう。ここで言うクリーンには、二つの意味がある。一つは、下草を焼き払い、動物の足跡を見つけやすくするとともに、ブッシュの見通しを良くし、獲物の発見を容易にする、すなわち、狩猟目的で視界をクリーンにすること。もう一つは、この場合のように、害虫を駆除することである。このように、ブッシュに火を放つのは、まことに

理にかなった習慣なのである。その恩恵に浴したわたしたちは、宿舎の回りから犬ノミをめたく駆逐することができたのであった。

花火大会

その夜のこと、板良敷氏とわたしは、宿舎のそばの切り株に燃え移った火がいまだに消えず、くすぶり続けるのを眺めていた。暗い中でちろちろと燃える火は何か心休まるものを感じさせる。同じ心持ちなのか、顔見知りのアポリジニの子供たちも回りに集まってくる。彼等と雑談するうち、日本から持参した花火をここで披露しようと思ひ付く。もし機会があればと、子供用の花火セットを出発前に買ってきたのである。打上げやドラゴンなどの派手なものはなく、いたってオーソドックスな手持ち花火ばかりであるが、子供たちは大喜びだ。歓声に釣られて、隣に住んでいる青年たちもやってきた。各自、火種の切り株に花火をかざして着火する。大掛りな仕掛花火などは、テレビで見えて知っているが、こうして自ら花火遊びをすることはほとんどない

と言う。

花火に慣れていないためか、彼等の遊び方はいたって乱暴だ。花火をじっと手に持った炎の色の変化を楽しむのではなく、振り回したり、手に持ったまま走り回ったり、それを人に投げ付けたりと、大騒ぎである。派手なものほど好みに合うらしく、線香花火は全然人気がない。ああいう、かすかな、滅びゆくものをいとおしむような日本人の感性と彼等のそれとはかけ離れているのだろう。だいいち、線香花火の火球が落ちないようにじっと持っていることが、まずできないのだから。

この騒ぎを見ながら、アポリジニ文化における火、あるいは文化における感性の問題というの、おもしろいテーマではなからうかと考えていると、いつの間にか、知らぬ若い女性が数人仲間に加わっている。聞くと、徒歩で一〇分ほど離れたトップ・キャンプと呼ばれる集落から（図3参照）、こちらに一時避難してきたようだ。そういえば、今夜は Barge（平底貨物船）が来た夜であった。

今朝早く、二週間ぶりにダーウィンから

貨物船がやって来た。それに載って、食品などとともに、ビールも届いたのだ。マニングリダに酒類を持ち込むには許可が必要である。許可を得た者は、ダーウィンに注文して貨物船で配達してもらうことができる。こうして届いた二週間分のビールを、アポリジニの男性たちはその夜のうちに全部飲み尽してしまう。ある男が奇的にも残しておこうと思っただけでも、仲間にめざとく見つけられ飲まれてしまうのがオチだから、自ら飲み尽してしまうほかはないのだ。

そんなわけで、貨物船が来た夜は、必ずあちこちでケンカや騒ぎが起るヴァルブルグスの夜となる。明方近くまで、男たちの怒鳴り合う声、それをたしなめる女たちの声が聞こえてくる。そして次の朝、飲み過ぎてダウンしたアポリジニの男性たちは、だれ一人として職場に出て来ない。したがって、郵便局、マーケットの扉は開かず、BACも開店休業となるのが通例である。くだんの若い女性たちは、Bargeの夜のこの騒ぎを嫌ってこちらに避難して来たというわけなのだ。

昼の間アポリジニの女性は一般に不愛想なのに、今夜の彼女たちは、なんだか親しげにわたしたちに話しかけてくる。スカートをたくし上げたりして、ふるまっても大胆だ。彼女たちにも、酒が少々入っているのか。あるいは、男女間の交際には多々タブーがあるそうだから、人目が少ない夜になると、昼間猫をかぶっていた女性も変身して大胆になるのかも知れない。こうして顔をつき合わせて話していると、アポリジニ女性にけっこう美人が多いのに気付く。特に、診療所に勤める看護婦さんは相当に美しい人だ。美人は美人と認識できるようになってきたのも、わたしの意識の垣根が取れた証拠であろうか。

かくして、野火から始まった花火大会は、アポリジニの子供たちをおおいに喜ばせるとともに、わたしのアポリジニ女性美開眼という思わぬ成果をもたらし、大成功のうちに終了したのである。

社会保障費給付業務のコンピュータ化

先に触れたように、今回の訪問では、新しいソフトウェアの開発もわたしの目的の

一つである。そもそもBACは、アウトステーションの住民たちの生活を支援するための公社であるが、扱っている業務は、自動車・ボート・風車・給水ポンプなど機械類の修理、社会保障費の給付、美術工芸センターにおける芸術作品の製作支援・買上げ・販売、という三つに大きく分けられる。これらのすべてをコンピュータ化するの、ボンド氏のもくろみである。

第一番目の修理業務を支援するソフトウェアは、これまでの二回の訪問で一応完成し、まがりなりにも作動している。今回の訪問では、コンピュータ化プロジェクト第二弾として、ボンド氏と相談の結果、社会保障費給付業務のコンピュータ化に着手することになった。

オーストラリアは、必ずしも社会保障の先進国というわけではない。これは少し古い一九八〇〜八一年の統計だが、総務庁統計局編『国際統計要覧』によれば、社会保障給付額は国内総生産の一・二パーセント強で、二〇〜三〇パーセントの北欧・中欧諸国より低く、一〇パーセント強の日本よりはやや高いレベルである。ただ特徴的な

は、その財源のうち、被保険者や事業主が払う保険料の占める割合が極めて低く、七割が国庫負担によっていること、すなわち、相互扶助的性格ではなく公的負担の考え方に基づいていることである。この点では、ニュージーランドとともに資本主義国の中では特異であり、むしろ社会主義国に近い。定職を持たないアポリジニの人たちの場合、現金収入の大きな部分を占めるのは、こうした性格を持つ社会保障費なのである。

週に一度、BACに小切手の入った封筒の束が届く。ダーウィンにある連邦政府の担当事務所から、アウトステーションに籍を置くアポリジニの人たちにあてて、社会保障費が送られてきたのだ。その費目は、老齢年金、寡婦年金、寡夫年金、扶養手当、失業年金、疾病年金、障害者年金、等々、多岐にわたる。受け取りにやって来た大勢のアポリジニの人たちで、BACはこたがえす。手のすいたBACの従業員が二人がかりで、ノートの名前を書き込み、各人に封筒を手渡ししてサインをもらう。この作業がいつと集中して繁忙を極め

る。

現在のところは、手作業でノートに小切手の受け取り・手渡しを記録しているが、これをコンピュータ化して作業能率を上げたい、というのがボンド氏のねらいである。他方、わたしたち民博オーストラリア研究グループにとってのメリットは、これによって、アポリジニの人たちの現金収入ルートに関するデータが得られることである。しかし、わたしたちのねらいはこれだけではない。

この業務をソフトウェアによって行なうとすれば、まず、各受給者をコンピュータに登録せねばならないが、その際、各人の種々の属性データも合わせて登録してもらいたいのである。ここで考えられる属性としては、本人の氏名、生年月日、所属する言語グループ名、出身のアウトステーション名、そして、その人の配偶者、両親、子供それぞれについての同様の属性が挙げられる。こうした個人属性が登録されれば、少なくともBACが関係しているアポリジニの人たちはほぼ全員の親族関係が把握できることになるのだ。

もちろん、このデータはプライバシーに深くかかわるものであるから、その扱いは充分過ぎる配慮が必要なのは言うまでもない。ポンド氏が、わたしたちのこのような目的を充分承知したうえで、コンピュータ化を進めようとしているのは、彼とわたしたち民博グループとの間に信頼関係が存在するからに他ならない。

自閉的生活へ逆戻り

多忙なポンド氏と打合せをする時間があまりとれず、アポリジニの人たちの属性についての知識が不十分なまま、わたしは見切り発車で適当にデータ構造を決め、システムの概要を設計し、ソフトウェア作成にとりかかった。花火大会の二日後、滞在期限の切れた板良敷氏は帰国してしまっただけ、もはやわたし一人で学校を覗きにゆくこともひかえ、以前のようにBACと宿舍を往復する生活に逆戻りしてしまった。

ひととおりソフトウェアが完成したので、ポンド氏およびこの業務に通曉しているアポリジニのパトリック氏にソフトウェアの動きを見せたらう。ここで、わたしの

不勉強が多々露呈してしまった。まずわたしに驚いたのは、配偶者も子供も独自の姓と名を持っており、親の姓を受け継ぐのではないことである。しかも、何らかの理由で簡単に姓名を変えることもあるそうだと。ということは、ここマニングリダ近辺の人たちは、お互いに顔見知りであって、各人の識別にあって名前はそれほど重要なものではないのだろう。現にパトリック氏などは、子供も含め六〇〇人程の人たちそれぞれの親子関係、婚姻関係をすべてそらんじている。

次にわたしが驚かされたのは、配偶者の数である。妻の数はせいぜい二人までだろうと高をくくっていたのだが、四人も妻を持つ艶福家もいるとのこと。さすがに最近の若い世代では一夫一婦が普通らしいが。当然、子だくさんも多く、三〇人も持つ例があると聞いて、わたしはのけぞってしまった。

さあたいへん、この驚くべき実態に合わせるべく、データ構造とソフトウェアを大中に修正せねばならぬ。妻は二人まで子供は一人までしか入力できないし、それぞ

れ独自の姓が持てるようには作っていないのだ。滞在期間があと一週間しか残っていないことにあせりを感じながら、毎日深夜二時頃までBACに居残り、ソフトウェアの修正、というよりはほとんど作り直しの作業を黙々と続ける。なぜ毎回、こうも泥縄を繰り返すはめになるのだろう。

かくして、マニングリダを去る当日の早暁、ようやく全体の修正が終わった。ドキュメントを整理し、ダーウィン行き飛行機が発する正午までの数時間、パトリック氏とアルバイターのローリー嬢を相手に、使い方の講習を行なう。考えてみると、このソフトウェア・システムによる親族関係のデータ収集は、従来の聞き取りによる親族関係調査とは異なり、親族関係を熟知している任人自身にデータ入力を行なってもらおうので、正確なデータの集まることが期待できるのである。

ポンド氏は、もし基金が得られれば、社会保障費給付業務専用にもう一台パソコンを購入し、それを受給者が集まる窓口に置きたいと考えているようだ。そのパソコンは、BACの奥の院に引き籠っている現

在このパソコンと違って、アポリジニ大衆の目に触れる場で活躍することになる。彼等とコンピュータとの触れあいの中で、おそらくさまざまな事件や珍談、奇談が生まれるにちがいない。それらは、アポリジニの人たちとコンピュータとの関わりを考えるうえで貴重な事例となり、さらには『民博通信』先号で述べたような、「民族情報学」あるいは「情報人類学」的研究の材料となるだろう。

これらの点を考えると、社会保障費給付業務支援用のこのソフトウェアが本格的に稼働する日が待ち遠しい。とりあえず、二カ月はかりの間、試用して使い勝手を調べ、不具合な点を民博まで連絡してほしい、とポンド氏ははじめパトリック氏、ローリー嬢に言い置いて、帰り支度のために宿舍に飛んで帰る。

バッグ二つを肩に宿舍を出て、ドアに鍵をかけた時、隣でテント生活をしている一家のおばさんが、わたしの名を呼ぶ。今まで話をかわしたこともなく、無愛想だったそのおばさんが、「日本に帰るのか。さようなら、また今度」と手を振ってくれる。

あのおばさんとも心が通うようになったのかと、思わず胸にジーンと来たわたしは、力いっぱい手を振り返し、叫んだのである。「きつとまたやってくるよ」と。

(第五研究部)

